
落とした金玉はどこへいった？

片金おとこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落とした金玉はどこへいった？

【Nコード】

N0673P

【作者名】

片金おとこ

【あらすじ】

気が付いたら既になかった金玉おこと、彼はどうなる？

気が付いたら・・・

小5の冬。

修学旅行先の温泉で気付いた。

金玉を両手でニギニギしているの友達を見て気が付いたんだ。

俺には片方の玉しかニギニギできないっだって・・・

人には本来2つの金玉があると知った時、俺は人じゃないのだと思っただ。

不安だった・・・でも両親には相談できなかった。

本当の子共じゃないなんて、受け入れられないからだ。

俺はヒッソリと生きた。

片金だと皆に知られれば、何からのルートを経て両親の耳に届き、俺が本当の子じゃないと気付いてしまうかもしれない。

そうになったらきつと「お前は私たちの子ではない」という言葉聞く羽目になる。

優しい両親には違いがないから、どうやっても俺をフォローするだろう。だけど、それは辛いことこの上ない。

だって、本当の両親に会いたいと思う俺が居るからだ。

もちろん、そんな願いもあの両親なら叶えてくれるだろう。

だけど、両親としたら複雑な気分になるだろうな・・・

俺は罪の意識を感じた。

だが、それ以前になぜ、片方無いのかそれだけが気になった。

罪の意識の一方で、片方が無い疑問にさいなまれた俺は、自然と疑問と戦う事で今日を生きていたんだと思う。

疑問を好奇心で埋めていき、罪の意識を忘れる方が楽だったからか

もしれない。

そうして気付いた時、俺は26歳になっていたんだ。

だが、いまだに片金の真相はつかめない。

俺の金玉は何所へ行ったのだろうか？

誰か、この小説を通して俺に片金の真実を教えてください。
片金おとこ

b
y

気が付いたら・・・（後書き）

なんじゃこりゃ
w

最近思うこと

最近、思う。

片方無くしたんじゃないくて、最初から無かったんじゃないかって。それなら、全ての辻褄が合うのだよね。

俺が最初に思ったのは、何らかの事故で無くしたことだった。蹴られたり殴られたりしただけで、やっぱり両親から生まれて来たのだと・・・

だけど、レントゲンを撮っても金玉の影は見当たらない。最初から無かったとして仮説を立てるのが自然だった。

自分にとって一番楽だったのが、両親から生まれる際に遺伝的に問題があったという事にする訳だ。

だが、それだとDNA検査がどうしても必要になってくる。

しかし、冷静になって考えても、それは無意味な行動でしかない。先天的に問題があったとしても、母親の胎内で後天的に作用したかもしれないからだ。

また、先天的に問題が無くても、後天的に問題があるという保障にはならない。

生まれた後に片金の赤ん坊と取り違えた可能性もあるからだ。

いずれにせよ、DNA検査は怖くて出来ん。

だとしたら、それ以外で片金の真相さぐるしかない。

俺は、ひとまずUFO関連の文献を読み漁る事にした。

万が一でも宇宙人の両親が迎えに来る可能性を考慮に入れて・・・

1分後

さっきから、お空を見上げても全くUFOが見えん。

畜生！何所にいやがるんだ！！

俺がいきりたっている、遠くの方から、なにやら声が聞こえた。

俺の返事に答えてるみたいだ。

UFOに違いない。

俺は必死で叫んだ。

UFOもそれにあわせて言葉を返してくる。

だが、それが山彦だったと気付かなかったのは、俺の人生の最大の汚点だった。

気付いたら、時はながれてたらしく、5年の月日が経っていた。

俺は何をしているのだろうか・・・人生を棒に振ってしまったのかいえない。

だけど、ふと冷静になってみると、こんな波乱万丈な人生なんてそうそう無いよな。

小説として俺の体験談を公表すれば沢山の人に読まれるかもしれない。

そしたら読者が片金の真相を突き止めるかもしれない。

よし、俺はとりあえず、「小説家になろう」へ投稿してみた。

ほほほ

それにしても俺の人生は何だったのだろうか。

金玉の真実ばかりを追いかけて、気付けば34歳だよ。

嫁さんと子共が居てもおかしくない歳頃だよ。

なんで引き返せなかったんだろうか。

でも、良く考えてみれば、答えは簡単だった。

そう。人は努力をすればする程、諦めるのが難しい生きなのだ。

金玉の真相さぐるのを途中で止めてしまったら、これまで金玉に費やした全ての努力が水の泡となる。

俺の20年以上の努力が全てパーとなるのだ。

それだけではどうしても認められんのだ。

だからといって、これ以上、金玉に溺れるのだけの人生は嫌だ。

だから俺は、金玉を今日から断ち切る事にする。

一分後

駄目だ！

やっぱり金玉を忘れられない！

どうやっても金玉の事が気になってしかたがない！！

そりゃそうだよな。20年以上、金玉を追い求めた男だぞ。もはや俺は金玉の伝道入りしてもおかしくない。

国から金玉の称号が欲しいくらいだ。

でないと、俺の20年が一切報われないだろうが。

それにしても、くやしいな・・・

誰も、俺の努力を認めやしない。

金玉を追い求めた人生がそんなにいけないのか？

馬鹿にして笑うなんて、胸糞悪い。

俺の存在を否定してる奴らは、人の気持ち全然判ってない。

おまえられも、俺と同じ立場になってみる。

金玉から抜け出すのは容易なことじゃないのだぞ。

それを寄ってたかって罵倒して、中傷して、さらし者にして、お前は人間失格だよ。

と、心の中で思った瞬間、俺は何かが吹っ切れたのだと思う。

俺は、俺の様な可愛そうな存在を出してはいけない事に気付いた。

金玉とは事情は違えど、同じ様に誰からも理解されないで生きている人間は、この世の中に沢山居る筈だ。

だからこそ、偏見というものがある。

そして、その度に人は傷付ける。憎しみ合い傷つけあう。

そんな世界を俺はどうしたら変える事ができるのだろうか？

少し考えたら答えは明確だった。

それは・・・

それは・・・

全ての憎しみを俺に向けさせる事だ。

俺が片金おとことして、皆に馬鹿にされる、その度に俺も馬鹿に返す。

そうして皆に憎悪を向ければいい。

そうやれば全ての憎しみは俺に集中する。

そして孤立する。

孤独を味わう。

その苦痛に俺が耐えられなかったとき、偏見により、俺は孤独で死ぬのだろう。

しかし、死んだとしても、こうして主張した記録はネット上に残され永遠となる。

それを見て俺と同じように理解されない何かで苦しんでいる人が居たら学んで欲しい、

お前は一人じゃない。

この文字の上にて、お前と似たもの同士が居るんだ。

そう、俺とお前は同士。

時間を飛び越えて理解しあう仲間だ。

俺とお前は永遠だ。

ここからは俺の我がままなのだが聞いてくれないだろうか。
俺は死してなおココに居るが、忘れられる運命にある。

新たに人が生まれ現れ新たな情報で埋もれる俺は、この先、お前の
様な者が探しても見つからなくなるだろう。

だから、そいつの為に人肌ぬいでやつてもらえないだろうか。

判っているだろうが同士が居ないのはとても寂しい事だろう。

この先の俺たちと同じような思いをする者を出さない為に、俺がし
た事の様に戦ってはくれまいだろうか。

申し訳ない事とは思^う。辛いババを引くだけである。
だ^けど、そうしないと、俺は死んでも死に切れない。
一生、ここにさまよい成仏できそうにないんだ・・・

さっきのはジョークだよw

俺はちゃんと成仏すさ。

そんで生まれ変わってもう一回同じことするさ。

そんで死んだらまた同じことをする。

そうやってれば何時かは、判ってもらえる日が来るはずだ。

その時が俺の理想郷。

だから、わざわざ、お前が俺の変わりをやる必要なんて全然無い。

むしろしないでくれ。

そうすれば、その時が来た時、俺一人の力で理想郷を作り上げたことになるんだ。

男として偉大な事を成し遂げれるんだ。

だから、お前は楽に時を過ごせば良い。

じゃあ、な。

俺は、いつでもココでお前が遊びに来るのを待ってる。

といっても成仏してるから、ここにあるのは俺の分身しかいないけど・・・

まあ、そいつと楽しくやってくれよな。

ちなみに、その分身の名は――

さっきのはジョークだよw（後書き）

で、結局、金玉はどこにいったの？

うん。とりあえずレントゲンは骨を撮影するもので金玉は映らないそうです。

何所にいったのやら・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0673p/>

落とした金玉はどこへいった？

2010年11月26日15時29分発行